

11. 図書館および図書・電子媒体等

新見公立大学法人 中期目標

IV. 大学の教育研究等の質の向上に関する目標

1 教育に関する目標

2) 教育の実施体制

(4) 教育環境の整備及び充実

教育理念及び教育目的・教育目標を達成し、時代の変化や社会の要請に対応可能な教育環境を整える。

3 学生の確保及び支援に関する目標

2) 学生への支援

学習支援、生活支援及び進路支援に関しその支援体制の一層の充実を図る。

4 地域社会との連携及び貢献に関する目標

1) 地域との連携及び貢献

(1) 教育研究成果の地域還元

保健医療、福祉、幼児教育における地域の求めに応じた取組を行ない、地域に積極的に貢献し、開かれた大学として広く学習の機会を提供するとともに、地域と一体になった事業等を推進する。

(a) 図書・図書館の整備

〈現状の把握〉

本学図書館は、2011 年度以降は併設大学との共用施設である。図書館の資料収集は、本学の教育・研究分野である看護・医療・保健・幼児教育・介護福祉とその関連分野の専門図書を中心に行っており、シラバスに記載されたテキストや参考書は収集するように努めている。また図書館として備えるべき基本図書、参考図書および大学生として不可欠な教養図書についても、蔵書構成を確認しながら収集・整備を行っている。

資料の選定は、学科選定、図書館、教員の推薦図書、学生選書、リクエストに大別できる。学科選定では、各学科教員が各専門分野の視点から学生の学習や研究に必要な資料を選定し、カリキュラムに対応した関連図書の整備に努めている。図書館選定では、基本参考図書やシラバス掲載図書および学生の幅広い教養と総合的判断力を養うために必要な資料について分野を超えて収集し、学生の自主的学習や研究支援ができるように努めている。また、教員推薦図書や学生選書は、学生の読書への興味、関心を高める一助となっている。教員の研究に必要な資料、学生の教育・学習に必要な資料をバランスよく収集する体制を

とっている。

2010 年度の図書受入れ冊数は 2,473 冊（製本雑誌含む）、2011 年 5 月現在の図書蔵書数は 76,450 冊（内、洋書 5,369 冊、製本雑誌含む）で、蔵書のうち、看護・医療・保健関係を包含する自然科学分野が 29%、幼児教育・福祉を含有する専門分野が 34%を占めている。

学術雑誌は、2011 年 5 月現在、医療・保健・福祉関係を中心に、和雑誌 57 タイトル、洋雑誌 19 タイトルの学術雑誌を購読している。また、他大学等紀要所蔵タイトル数は、707 タイトル（内、外国語紀要 10 タイトル）である。また本大学図書館は、新見市が設置する新見市交流センター図書館として市民に開放しているため、新見市交流センター予算で学生の学習や研究に必要な一般教養雑誌 23 タイトルを購読している。

視聴覚資料は、ビデオ、DVD、音楽 CD 等があり、本学の教育・研究分野に関するものを中心に収集しており、2010 年 5 月現在の所蔵タイトル数は 622 点である。視聴覚資料は、館内の AV ブースコーナー内に排架し、備え付けブース（5ブース）で視聴できるようにしている。また、講義での利用頻度の高い視聴覚資料は、教員研究室や講義室に排架し、講義室等で視聴できるようにしている。

有償の文献検索データベースとして、「医学中央雑誌 Web 版」、「NICHIGAI MAGAZINEPLUS」を契約しており、図書館内設置のパソコン他、学内 LAN に接続したパソコンから利用可能である。

施設・設備、開館時間については次のとおりである。本学図書館は、旧本館棟から本学構内に新見市が設置した新見市学術交流センター内に移設し、2008 年 4 月 1 日から新図書館として開館している。図書館施設・設備、開館時間を表 11-1 に示す。図書館の利用状況は表 11-2 に示す。

表 11-1 図書館の施設・設備、開館時間

総床面積	1584.95 m ²	
収容可能冊数	10 万冊	
一般閲覧席	167 席	
グループ閲覧室	5 室 (30 席)	
AV ライブラリー	5 室	
主要設備	<ul style="list-style-type: none"> ・ 図書館電算化システム 一式 (システム管理専用端末 2 台、IC 式自動貸出専用端末 2 台) ・ 手動集密書庫 2 室 (耐火書庫 1 室) ・ 視聴覚機器 ビデオ DVD デッキ 5 台 ・ 蔵書検索性用パソコン 2 台 ・ 情報検索性用パソコン 5 台 プリンタ 1 台 ・ 複写機 2 台 (学内用 1 台、学外用 1 台) 	
開館時間	授業期	平日 9:00~20:00 土・日曜日 10:00~18:00
	休業期	全日 10:00~18:00
休館日	年末年始 (12 月 28 日~1 月 4 日)、国民の祝日	

表 11-2 図書館利用状況

年 度	2007 年度	2008 年度	2009 年度	2010 年度
開館日数 (日)	229	334	333	337
入館者延べ人数 (人)	—	21,189	18,024	18,126
内、学内利用者 (人)	—	17,965	16,462	16,804
内、学外利用者 (人)	—	3,224	1,562	1,322
貸出総冊数 (冊)	4,014	9,587	10,008	11,131
内、学生貸出 (冊)	—	6,269	7,091	8,235
内、教職員貸出 (冊)	—	1,095	1,315	1,243
内、学外者貸出 (冊)	—	2,223	1,602	1,653
学生 1 人あたりの貸出 (冊)				

2010 年度以降は併設大学の教員学生を含む。

〈現状の分析・評価〉

本学図書館の目的は、学生の学習・研究支援および教員の教育・研究支援を最も重要な使命と認識している。したがって、資料収集、蔵書構成においては主として学科専門分野である看護・医療・保健・幼児教育・介護福祉分野およびその関連分野専門図書の収集を基盤としており、専門職の養成を目的の一つとしている本学の特性に合致している。また、大学図書館として、必備の基本図書、教養図書についても現在の蔵書構成と学内の需要とを検討しながら整備しており、一般教養教育にも貢献している。

資料選定においては、学科選定（各学科ごとの各教員が個別に選定）、図書館司書選定、教員の推薦図書（私の読書ノートコーナーとして展示）、学生選書（年 1 度の学生選書ツアーによる選書）、学生・教職員のリクエストに大別しており、大学図書館として専門図書選定を主として、特定の分野等に極端な偏りのないよう選書している。特に、年度当初の図書委員会において、学科選定図書の購入予算について、各学科の学生数に見合った予算分配額を決定している。

教員推薦図書は、本学教職員が学内専用ホームページ「私の読書ノート」に推薦文とともに推薦した図書であり、原則としてこれらすべてを購入し、入口付近展示架に配架している。また、学生選書図書は、希望学生が大型書店に出かける学生選書ツアーを実施して学生自らが選書したもので、同じく入口付近展示架にコーナーを設置して展示している。どちらも図書館利用促進、読書への動機づけにつながっている。

2011 年 5 月現在の蔵書冊数は、76,450 冊（内洋書 5,369 冊、製本雑誌を含む）である。特に 2008 年 4 月に新見市学術交流センター内に移設されて以降年間約 2,500 冊、4 年間で 10,000 冊程度増加しており、順調に整備が進んでいる。また、蔵書構成については、近年、幼児教育・福祉を含む社会科学分野の増加がみられる。蔵書構成から見て、各学科専門分野の比率が 6 割以上に達している。この比率は、大学図書館として適切であるといえる。

これらの学術雑誌、学生を中心に活用されている。また他大学紀要も、文献情報として活用されている。これらの学術雑誌および他大学紀要は製本して所蔵している。

視聴覚資料については、選定、収集が学科の要望に基づいているため、大部分が看護、幼児教育、介護福祉等学科関連の内容である。2008 年度以降は、これらに加えて新見市学術交流センター予算で一般向け DVD（DVD 絵本、映画等）も購入している。視聴覚資料については、本館が大学図書館との位置付けであるために、法令上の規制で、個人の私的利用目的での貸出は行っていない。館内に AV ブース（5 ブース）設備があり、随時視聴可能である。しかし、現状ではブース利用は少ない。

文献検索データベースは、館内設置のパソコンおよび学内 LAN に接続したパソコンから利用できる。特に「医学中央雑誌 Web 版」は看護学科学学生に有効に活用されている。

図書館施設は 1 階と 2 階からなり、閲覧席数 197 席は併設大学を含む学生数の約 50% に相当する。また 1 階部分のグループ閲覧室 5 室（1 室 6～8 席）も随時利用でき、閲覧席数に不足はないと評価できる。また、収容可能冊数は、現在 76% の蔵書収容率であり余裕がある。

開館日については、2007 年度まで土・日・祝日に休館していたが、2008 年度からは土・日も開館し、休館日は祝日と年末年始（12 月 28 日～1 月 4 日）のみであり、学生、教職員および一般利用者の便宜を図っている。また、開館時間についても 2007 年度までは、閉館時間が月～木曜日 19：00 まで、金曜日 20：00 までであったのを 2008 年度から月～木曜日は 20：00 まで延長し、土日は 18：00 までとしている。平日の延長した時間帯にも職員 1 名が勤務している。また、ネットワーク環境については、蔵書検索性用パソコンを 2 台、情報検索性用パソコンを 5 台設置し、それぞれ館内 OPAC、岡山県横断検索システム、市内各図書館 OPAC、および文献データベースにアクセス可能であり、利用者の自主的な検索を可能にしている。また、館内には無線 LAN ルーターを設置しており、個人のパソコン（設定が必要）からもインターネット接続が可能である（第 10 章参照）

〈改善方策の検討〉

図書館資料の充実、利用性を図るためには、各学科教員の専門分野と関連した系統的・体系的な資料収集と、利用者の需要を把握し、選書、蔵書構成に反映させるシステムの整備が必要である。資料収集方針を明確化するとともに、定期的なアンケート調査等により、利用者ニーズを把握・分析し、図書館の利便性を高めていく努力をしていきたい。また、広報、ガイダンス、文献検索講習会の開催等により、学生に図書館の必要性、利便性を印象付け、大学図書館利用の意義、資料収集、文献検索等の具体的手法について理解を広めていくことも重要と考えている。

(b) 専門職員の配置

〈現状の把握〉

大学図書館は、学生の学習支援や教員等研究者の研究支援のために、学術情報を中心にした資料を収集し提供するという使命がある。そのための図書館を形成する重要な要素のひとつとして、専門職員たる司書の配置が重要である。司書は、専門的業務として大学の教育・研究目的に沿った資料収集方針のもと蔵書構成を把握し、資料・情報を受入、収集、集積評価し、分類・目録データベースを作成し、体系的に整理保存して利用者に提供している。またレファレンスサービスや図書館の利用者教育など図書館職員の重要な業務として行っている。また経営管理的業務としては、サービス、企画の立案、システム運用管理、物品の購入整備等で構成される。これらの業務に対する 2011 年度職員構成は、館長（教員兼務）1 名、非常勤嘱託職員（司書）1 名、臨時職員（司書）2 名である。

〈現状の分析・評価〉

図書館職員には基盤となる図書館業務の専門知識に加え、電子情報の進展や新しいニーズに対応した情報処理能力も求められている。何より利用者の需要に的確に沿った高度で質の濃い多様な情報を提供するためには、系統的、計画的な研修や職員個人の自己研鑽による業務努力が不可欠であり、豊富な事例経験が必要である。本学図書館には 3 名の司書資格を有する専任職員が配置されており、専任職員配置の観点からは十分基本的要件を満たしている。3 名の職員のうち、1 名は嘱託職員、2 名が臨時職員である。業務の専門性から公立大学および公立短期大学図書館協議会や県内大学図書館協議会などが主催する外部専門研修への参加機会が必要と考える。特に大学図書館業務では学部学科の専門性を十分理解し、所属学生、在籍教員のニーズを的確に把握し、自館の蔵書資料や業務経験としての事例と照らし合わせながら速やかに情報を判断し、提供を行う必要があるため、図書館においては今後も専門職員が継続して業務に当たることが望ましい。

〈改善方策の検討〉

本学の学習・教育・研究を支える機関として、図書館専任職員の人材養成はきわめて重要な課題であり、長期的・計画的な職員体制と研修体制を検討する必要がある。

(c) 学術情報へのアクセス

〈現状の把握〉

図書館業務全般に電算システムを導入し、図書館の蔵書目録をデータ化したオンライン蔵書目録（OPAC）を学内、学外へ広く公開している。館内には、蔵書検索用端末 2 台、学術情報検索専用端末 5 台を設置している。

有償のデータベースは医学中央雑誌 Web 版、NICHIGAI MAGAZINEPLUS を契約しており、学内 LAN にて提供している。

図書館 Web には、図書館の利用案内、所蔵資料の紹介の他、有償データベースへのリンク、無償のデータベースや電子ジャーナル・その他学術情報へのリンクを掲載し、学内外の利用者に広く情報を提供している。

また、学内で刊行された紀要は、国立情報学研究所の学術雑誌公開支援事業のもと、目録情報および1999年度から2009年度までの本文PDFをCiNiiにて公開している。

図書館間の連携協力を図るため、公立短期大学図書館協議会、公立大学協会図書館協議会、岡山県大学図書館協議会、日本図書館協会、岡山県図書館協会に加盟しており、研修への参加、情報交換、相互協力を行っている。

相互協力業務については、2008年度よりNACSIS-ILLシステム、ILL文献複写等料金相殺サービスへ参加し、参加館相互の図書貸出・文献複写申込等の利用の便を図っており、また、文献複写依頼業務、複写料金等授受業務が大幅に改善された(表11-3)。さらに同年より岡山県立図書館事業である岡山横断検索・図書館間相互貸借システムに参加し、県内公共図書館、県内加盟大学図書館との相互貸借を行っている。

表 11-3 相互協力利用状況

(件)

年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度
複写依頼件数	1,157	1,150	957	964
複写受付件数	29	25	32	17
現物借受付件数	0	210	188	241
現物貸出件数	0	96	63	58

〈現状の分析・評価〉

蔵書目録については、オンライン蔵書目録(OPAC)を学外へも公開していることに加え、岡山横断検索・図書館間相互貸借システムに加盟していることにより、広範囲からの資料提供の環境が整えられている。

有償データベースについては、主として併設大学看護学部生に有効活用されている「医学中央雑誌Web版」と比較して「NICHIGAI MAGAZINEPLUS」は看護学部生および他学科学生の利用頻度が少ないと見受けられるため、今後他のデータベースも検討していく必要がある。

また、学内刊行の本学紀要については、CiNiiにて公開されているものもあるが、今後機関リポジトリ等への参加も考慮する必要がある。

図書館相互の連携については、他大学図書館との相互協力により文献複写依頼を積極的に行う本学学生のニーズに応えている。また2010年度大学学部発足に伴い、公立大学協会図書館協議会へも加盟した。

〈改善方策の検討〉

有償データベースの目的は文献情報提供業務、利用者における有効活用であることから、現在契約しているデータベースが利用者および業務において有効に活用されているか、契約内容は適切であるかなど、金額も含め、代替データベースと比較検討していく必要がある。

また学生の積極的な文献検索収集に有効活用されるよう、新入学生への利用ガイダンスを行い、在学生も対象にした利用指導を随時行っていくことが必要である。

(d) 図書館の地域開放

〈現状の把握〉

「地域に開かれた大学」の一環として、本学図書館は 2008 年 4 月、新見市学术交流センター内に新たにオープンし、広く一般市民にも利用できる図書館として運営している。利用者には、有効期間 1 年の利用者カードを発行している。入館の際には受付を必要とし、入館許可証を携帯しての利用となる。利用範囲は貸出、閲覧、複写とし、検索パソコン利用、電子情報コーナーパソコン、有償データベース利用についても契約の範囲内での利用を認めている。また一般利用者には、各学科の専門図書が有効に活用されており、学术交流センター内に行政と大学が協働で「にいみ子育てカレッジ」を開設していることもあり、絵本を利用する親子が多いのも特徴である。

また、2009 年 10 月、放送大学岡山学習センターと新見市の間で、新見市学术交流センター内に放送大学視聴覚教材を設備した新見教室設置の締結がなされ、同月より放送大学利用者および学内に開放している。過去 3 年間の一般市民利用登録者数の推移は表 11-4 のとおりである。

表 11-4 一般市民の利用登録者数 (人)

年度	2008 年度	2009 年度	2010 年度
登録者数	451	173	130
利用者数	3,224	1,562	1,322

〈現状の分析・評価〉

新見市学术交流センターに移設した新図書館は本学附属図書館であると同時に一般利用者への開放、市民との共用が前提であった。図書館の主な蔵書構成は学科専門分野図書であり、市内公共図書館にはない特色である。現在でも、地域市民利用者の利用が定着しているが、今後も需要が伸びると考えられる。学外利用時間は平日土日ともに 10:00~18:00 までとしており、学内開館時間よりも短くしている。これは学内利用を優先すること、勤務体制および防犯安全への配慮によるものである。一般利用者の閲覧は、大学附属図書館であることから入館時受付を必要としている。また、貸出は 1 人 5 冊 14 日間までであり、

市内他公共図書館と比べると貸出可能冊数が少ない。この点でも学内利用を優先している。しかし、一般利用者のリクエストについては、岡山県横断検索・相互貸借システムに参加しているので、市内公共図書館、県内各図書館から無償で取り寄せが可能であり、市内図書館間では相互に返却も可能である。一般利用者のリクエスト資料については相互貸借による取り寄せ貸出を優先しているが、資料等の必要性が高いと判断すれば検討の上、購入している。

〈改善方策の検討〉

本学図書館は学科専門図書が主体であるが、市内図書館にはない特色をもっており、今後も学術専門情報を提供する地域に開かれた大学図書館としてサービスを行っていく必要がある。蔵書の専門分野は看護・医療、幼児教育、地域福祉・介護分野等であり、中でも幼児教育学科分野である絵本を配架している「ねころんぼコーナー（大型絵本、紙芝居も豊富）」は地域の乳幼児と保護者の利用頻度が高い。また看護分野、介護福祉分野資料においても各専門職に従事している一般利用者をはじめとする利用頻度が高い。今後もこのような特長を維持し、地域の利用者ニーズを的確に把握し、積極的に改善する。